

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

《医療系》

●広島大学医歯薬学総合研究科創生医科学専攻 「バイオデンティスト育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

診療との調整を付けやすくするため、曜日、時間帯を可能な限り固定して一連の段階を終えることができるよう、さらに複数のコースを設定した。しかし、実際は研究テーマを管理する研究室の行事や診療により、コースワーク期間複数回欠席したり途中退席を余儀なくされる学生が毎回生じた。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

大学院生の演習に対する意識と、医局や研究指導講座の認識不足。欠席した回の内容に関してはコースワーク担当講座が深夜や別日に補講を実施した。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

プログラム担当から、コースワークすべての回への参加を前提とした登録、コースワーク参加に関して研究テーマ担当研究室の大学院生への配慮・協力を再三にわたり促した。しかし、診療・研究に従事しながら科目を履修するというスタイルでは、スケジュール調整に限界があるように感じた。基礎学習期間内は診療から外れる、研究テーマの研究室から離れてコースワーク担当講座に配属されるというようなアメリカ式の対応も検討する必要があるように感じた。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

B. 円滑な学位授与の促進

⑤ポートフォリオ等を活用した到達度の把握と研究指導の充実

《医療系》

●広島大学医歯薬学総合研究科創生医科学専攻 「バイオデンティスト育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

大学院全体で習得したものについてのポートフォリオという概念自体の理解を得ることが難しく、「コースワーク」についてポートフォリオを課すこととなった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

大学院生個々の研究テーマを指導するグループをかならずしも把握できていなかったため、当該大学院生の評価のために教職員で共有するポートフォリオのデータの範囲を決めることができなかった。指導グループ外の大学院生についてコースワークで実施した実験手技の理解や修得度の把握が履修期間後は追跡できず、大学院修了時にコースワークが最終的にどのような成果をもたらしたのかという点について、教員側へのフィードバックが十分できない状況にあった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

ポートフォリオで評価する対象・科目が複数にまたがる場合は、事前に担当教員および研究テーマ指導教官、学生との間で個々にポートフォリオのガイドラインを設定する必要がある。